海外移民の文化変容態度と文化的アイデンティティ研究にみる在日コリアン研究への示唆（1）
：二次元モデルと心理学的変数を中心に

Implications for Zainichi Korean Research from a Review of Acculturation Attitudes and Cultural Identity in Overseas Immigrants(1): Focusing on a Bidimensional Model of Acculturation and Psychological Variables

李　正姫・田中共子
LEE, Jung-hui & TANAKA, Tomoko

はじめに

本稿では，文化変容態度と文化的アイデンティティに関する研究の動向と課題を展望する。その目的は，海外の移民研究の流れから，在日コリアンを対象としたこれらの研究への示唆を得ることである。具体的には，海外で行われてきた移民の心理学的研究を展望し，そこで扱われてきた変数や研究視点の変遷を整理してから，心理学的研究の総じて乏しい在日コリアン研究において，その文化変容態度と文化的アイデンティティの研究をいかに進めればよいかの手がかりを得たい。

全体の構成としては，「１．文化変容の心理学的研究における視点の変遷」，「２．文化変容と関わる心理学的変数」，「３．文化変容を捉える二次元モデルの系譜」，「４．文化的アイデンティティ」，「５．海外における二文化への態度と適応」，「６．在日コリアン研究への示唆」を考えている。紙幅の都合から分割して報告することとし，本稿では第一報として前半にあたる上記の１から３までを述べ，後半の４から６については，次稿に譲ることとする。最初に各主題に即して未解決の問題や残された検討点など，具体的な研究課題を指摘しながら論を進め，最後に在日コリアンの文化変容態度と文化的アイデンティティ研究への示唆を総合的に論じる。

なお後述するように研究者によって用語の使い方に若干の差異があるが，本稿における暫定的な用語の定義として，「文化変容態度」を，「異文化との接触によって起きる，複数文化に関わる心理的・行動的な変容に存在する，一定の態度ないしは志向性」としてとらえておく。出身地であるエスニックの文化や集団に関するアイデンティティを，「エスニックアイデンティティ」として，滞在先における集団や社会-文化へのアイデンティティを「ナショナルアイデンティティ」としてとらえ，これらを総括して「文化的アイデンティティ」と称しておく。

1．文化変容の心理学的研究における視点の変遷

1．1　集団と個人レベルにおける文化変容

文化変容研究の必要性は，今日の心理学研究において高まりつつある。Jang, Kim, Chiriboga, & King-Kallimanis（2007）は，米国における移民人口の増加を考えれば，多文化理解や文化変容の研究の重要性は明らかだと主張している。移民の増加をはじめとして，文化間の人の流動性の高まりは，米国に限ったことではなく，日本も例外ではない。こうした認識を共有できる地域は，今日の地球上ではますます増えていき，文化変容研究の重要性を共有できる地域も増えていくだろう。

これまでの海外の移民研究をみると，文化変容を巡っては，集団レベルでの変化と個人レベルでの変化の両方が，研究上の視座として想定されていることを指摘できよう。集団レベルでは，社会経済的地位や社会状況などが注目されるが，心理学領域で焦点が当てられる個人レベルでは，さまざまな心理的反応の測定が試みられてきた。蓄積された知見は総じて，個人レベルの変容がうまくいけば適応状態に至るが，うまくいかないと文化変容ストレスが生じて，精神的健康が損なわれるというもので，例えばうつなどが測定されている（Berry, 2005）。最初のころの研究は主に個人レベルを中心に展開し（Graves, 1967），その後，個人と集団，両方の視点を総合的にみるべきだ（Berry, 1980），との主張が登場して今日に至っている。

文化変容について注目されるようになってきたのは，この50年あまりといえよう。この主題における心理学的研究の始点の一角とみなされているGraves（1967）は，異なった集団間の接触による個人たちが経験する変化を心理的文化変容（psychological acculturation）だと称している。Ward & Kennedy（1994）はこのGravesの見方について，それ以前には集団レベルの現象として認識されることが多かった文化変容を，個人レベルの現象という認識にシフトさせたものとして評価している。この見方では文化変容は，他の文化集団メンバーとの接触の結果起こる，個人が経験する心理的変化及び行動的変化をさすものと考えられる。しかし上記の定義では，文化集団との接触というきっかけを提示しているだけで，複数の文化に関する変容であることは表現されていない。異文化との接触で起きる変化をすべて指すのか，文化に関する変容部分を指すのかは明確ではない。だが態度としてとらえるなら，程度や類型を考えることは心理学的研究として自然な流れであろう。そこで強弱の度合や分類が試みられることになり，一種のパターンの存在を仮定して度合やカテゴリを表示したものが工夫されたのであろうと推測される。本稿では最初に述べたように，上記を若干補足して，文化変容態度を，異なったグループ間の接触によって個人が経験する心理的・行動的変化の中で，出身文化とホスト文化に関わるものとして捉え，そこで形成される一定の態度ないしは志向性，そしてその度合いの測定や類型化としてとらえておきたい。

続いてBerry & Kim（1988）では，文化変容を，集団レベルの文化変容を伴った，個人レベルの変化だと解した。

Ward & Rana-Deuba（1999）はこのいわゆるBerryモデルの発想は，Graves（1967）の心理的文化変容という概念を土台にして構築されたものと位置付けている。Berry, Kim, Power, Young, & Bujaki（1989）はこの着想を展開して，四つの移民集団における実証研究から“文化変容態度”の概念的分析を行っている。これが文化変容態度研究におけるBerryの二次元モデル最初の測定例である。二次元モデルとは，まずホストとエスニックの二軸を想定し，当てはまり度合に高低の二区分を設け，二次元の組み合わせをもって四類型を設定する考え方である。具体的には，移民を対象に，①「文化的アイデンティティと特徴」を維持したいかどうか，②「ホスト社会とのよい関係」を維持したいかどうかと問い，「はい」と「いいえ」で答えてもらう。そして①②とも「はい」と答えた移民は，「統合」(integration）と区分される。②のみ「はい」で①は「いいえ」なら「同化」(assimilation)，反対に①のみ「はい」で②が「いいえ」なら「分離」(separation)，①②とも「いいえ」なら「周辺化」(marginalization）とみなされる（Berryら，1989)。

このBerryモデルは，続く多くの研究者が参照する，影響力の大きな枠組みとして機能してきた。たとえばWardら（1999）は，このBerryモデルは，文化変容の研究や理論に顕著な影響を及ぼすものとして，広く認められていると高く評価している。Ouarasse & van de Vijver（2005）にも，Berryの文化変容モデルと四類型は数多くの学者から支持されている，とする記述がみられる。Berryの初期的な研究における提案は，こうして広く活用されていったが，Wardら（1994）では，Berryらの二次元モデルを基盤としながらも，測定の方法に若干の変更を加えた修正尺度が登場してくる。主な違いを挙げておくと，Berryらは二項目への回答を組み合わせた四類型を想定して，当てはまり度合をたずねており，ホストには社会的項目，エスニックには内面的な項目を使っている。しかしWardらは二次元への当てはまりを個別に測定し，中央値で高低を分割して組み合わせて四類型への割り当てを定義しており，ホストとエスニックは対項目で測定し，対応関係を重視している。ホストとエスニックという，葛藤をもたらし問題視されがちな二つの軸に注目し，その対比を分かりやすく概念化したモデルとして，利用しやすい基本モデルといえるかもしれない。文化変容研究は，Berryらと続くWardらのこの二次元モデルを基本に展開してきており，本稿の後半ではその具体的な測定項目などについてより詳しく論じたい。

では，文化変容は個人にいかなる意味を持つのか。個人のメンタルヘルスとの関連を巡って，Berryら（1988）は展望論文を著している。この両変数は必然的に関連しており，文化変容プロセスをたどった結果，うまくいけば適応に至るが，うまくいかなければ文化変容ストレスが生じるという。そしてメンタルヘルスの指標となる心理的な特徴は多様だが，適応の質を反映した特徴が主に用いられると述べている。肯定的な特徴としては，病気のない状態を超えた心理的well-being，否定的な特徴としては文化変容ストレスがあるという。

Berry & Sam（1997）では，文化変容が個々人にとってどれほど大変な経験であるかは個人差があるが，困難さの度合いは精神疾患（mental disease）や精神病理学（psychopathology）の観点から測

るのが妥当だと述べ，例としてうつや過度の不安の測定を挙げている。Berry（2006）では，文化変容の経験は，文化変容を担う個人に問題を引き起こすとして，文化変容ストレスの存在を主張している。

文化変容の影響を個人レベルで捉える研究の流れは，以上の例のように，ストレスや精神的健康といった臨床心理学的な視点を軸に展開していった。しかしながら，個人の臨床症状を個人の問題として論じる視点には，その後，多少の広がりが加えられていく。「移民者の個人要因だけで移民の精神的健康を解釈するのは無理があり，移民を取り巻く社会的状況を考慮に入れるべき」（Viruell-Fuentes, 2007）との主張が登場する。Berry（1980）は，心理学者は総じて文化変容を個人的な適応行動として理解しようとするが，集団レベルでの「接触－対立－適応」があった後に，個人的次元の行動が起きると理解するほうが妥当だとして，これを支持している。

上記にみられる視点の変遷をまとめると，集団単位の現象とみなされてきたものが，Graves（1967）によって心理学が得手とする個人レベルの研究へと転換し，臨床的な研究が発展したが，続く研究者は集団レベルを背景にして個人レベルの現象があるという社会心理学的な見方を提案し，差別とうつ（Berry & Sabatier, 2010）など両次元を含めた測定を試みるようになっていったといえる。臨床心理的な視点が先行し，社会心理学的な視点は後から加味されてきたことがわかる。

今では，個人的な事象としてのみ文化変容をとらえるよりも，背景に社会的な現象があって，それに影響され反応しているのが個人であるという，社会心理的な視点を取り込んだ見方が広まっている。Berry（2005）は約30年にわたるこの領域における研究を総括した展望論文で，集団レベルの文化変容（cultural/ group level acculturation）を考える時は，社会状況の理解が必要であると述べている。出身社会に関わる要因として，移住動機がどの程度自発的にしていたかが，重要な役割を果たすという。移民先社会の要因としては，受け入れ社会が移民に対してどのくらい寛大か，多文化社会なのか多文化を排除する社会なのかが，重要であるという。また個人レベルの文化変容（psychological/ individual level acculturation）については，新環境に適応するための心理的変化として，だれもが経験するものだとしている。人は比較的容易に適応もするし，文化変容ストレスを抱えてうつや不安になったりもするが，適応にはwell-beingの感覚や自尊心など心理的なものと，新環境での対人関係や日常生活の遂行能力など社会文化的なものがあるという。

1．2　文化変容の研究視点に関する課題

文化変容に集団レベルと個人レベルが想定され，ともに測定しながら研究を進めるのだとしたら，集団と個人の変容の間にはどのような関連が見いだされるのか。Berryの初期の研究では，集団レベルと個人レベルでともに，「接触から対立，そして適応へ」という経過が想定されていた（Berry, 1980）。しかし後には「集団レベルの文化変容から個人レベルの文化変容，そして個人の適応」という経過（Berry, 2005）が想定された。

想定や解釈はあるが，今日に至るまで集団レベルと個人レベルの時間的関係は，必ずしも正確に読み

解かれていない点が問題であろう。どちらかが原因でどちらかが結果という因果関係があるのか，あるいは単に共起性を持つ相互関係なのか，変化に順序性が想定されるのかどうかなどは，未詳のままである。また，集団レベルの文化変容を経ずに，個人レベルの文化変容が展開されることはないのかといった展開のバリエーションについても，答えは用意されていない。Berry（1980, 2005）にある，時間的な順序は常に集団レベルから個人レベル文化変容に移っていく，とみる仮説はまだ検証されていないことに，留意しておきたい。これは，今後の検討が待たれる課題の一つといってよかろう。

文化変容を巡っては，何が未解決でどういう検討が待たれているのかと考えていくと，上記以外にも，今日なお残された問題は少なくない。以下に，大きく四つの主題に分けながら述べておきたい。これらは，次の研究を構想する際の手がかりとなるものと思われる。

まず一つ目の主題として，文化変容自体の精緻な実証研究が望まれるということである。すべての移動集団または移動する個人で，文化変容が生じるのかどうか。生じない例があるならそれは何によるのか，生じ方はどのように説明ができるのか。

二つ目の主題は，四類型に関してで，具体的には以下の三つの問いが考えられる。第一に，四類型はどのような暮らし方や心理状態と対応するのか。四類型に区分された移民らの状況は十分に把握されているのか。特に統合と周辺化の多様性は，解明が不十分に思われる。第二に，その四類型にさらなるサブカテゴリは想定されないのか。第三に，統合が最も適応に有利と主張されているが，他の類型の適応価は適切に評価されてきたのか。他の類型のうちどれで心理的適応が悪いかは，周辺化だったり（Sam & Berry,1995），同化だったり（Wardら,1994）と一貫しないうえ，同化の社会文化的適応が良好との報告もある（Wardら,1994）。類型間の適応価の多様性は何によって説明ができるのか。また複数の類型で適応例が見いだされるなら，それぞれどのようなもので，いかなる質的な差異があるのか。

三つ目の主題は，精神的健康に関してである。それには以下の五点が挙げられる。第一は，文化変容研究において，ストレッサーとストレス反応が明確に区分されないまま，精神的健康が論じられているように思われることである。文化変容プロセスがストレッサーで，文化変容ストレスが結果として起きるとして，従属変数にはうつを使っている例があるが，ストレスとストレッサーの概念的区分にはあいまいさが残る。第二に，文化変容プロセスの何がストレッサーとなり，あるいはならないのか，個人にとって何がそれらを分けるのかという，詳細がよく分かっていない。第三に，文化間移動の肯定的側面は，well-beingとして漠然と表現されるだけで，詳しくは分かっていないことである。例えば創造性や共感性といった生産的な側面や，グローバリズムなどの価値観の変容は十分に解明されていないように思われる。第四に，文化以外のストレッサーへの注目が，不十分であるように思われる。社会経済的な側面は，社会学などの研究に比べれば等閑視されているといえる。生活保障や将来性などの社会的条件が，移民のメンタルヘルスに少なからぬ影響を与えることは，健康心理学的な見方からは容易に予想できよう。第五に，移民の総合的な状況をどのような変数で表現するのか。そ

こで精神的健康はどのような位置づけにあるのか。何が精神的健康を説明するのかが，多変量を用いた総合モデルで解明されれば，移民の精神的健康の維持・増進策への現実的な示唆につながるだろう。

最後に，四つ目の主題として，受け入れ社会については以下の二点が考えられる。第一に，受け入れ社会に関する探求が不足していることである。受け入れ社会の多様性を，一定の視点から分類したり，特定の変数で表現したりすることを試みながら，その変数が移民にいかに影響するかを探っていく必要がある。第二に，受け入れ側の社会文化的要因と，移動側の個人的要因は，どのように関連し合いながら精神的健康に影響していくのか。多要因を測定した量的研究と，事例を丁寧に追う質的研究をあわせた，統合研究が有効であろう。

2．文化変容と関わる心理的変数

2．1　文化変容と心理的適応・社会文化的適応

海外の先行研究において，文化変容と関連して取り上げられてきた心理的な従属変数を表1にまとめてみた。

表1　文化変容をめぐる心理学的研究に用いられてきた指標

著　者（年号）	対　象	指　標	心理的な従属変数のとらえ方
Jangら（2007）	在米韓国人移民一世	文化変容とメンタルヘルス（うつ・不安感）	－
Wardら（1994）	海外に居住しているニュージランド人の公務員	文化変容と心理的適応（うつ）/社会文化的適応（新しい文化背景における日常的な社会生活の遂行能力）	・心理的適応は，心理的well-beingや新環境における満足感と関連すると述べながらも，測定指標はうつのみ。社会文化的適応は，fit-inする力やホスト文化との妥協と関連すると想定して，社会生活の遂行能力を測定。
Ouarasseら（2005）	オランダに居住するモロッコ人二世	文化変容態度と心理的適応（メンタルヘルス（うつ））/社会文化的適応（学校での成功，仕事での成功）	・心理的適応の項目例：寝付くのが難しい，時々自分の人生は価値ないもののように思われる。 ・社会文化的適応の項目例：自分の成績に満足する（学校），上司は私がやった仕事に満足する（仕事）。
Berryら（2010）	カナダとフランスにおける移民二世	文化変容方略と心理的適応（自尊心）	・心理的適応はpersonal sense of well-beingを指すと解釈し，一般的な自尊心（Rosenberg scale），4種類の自尊感情（情緒，家族，社会，学校）などを測定。
Samら（1995）	ノルウェーにおける移民二世	文化変容態度と感情障害（うつ・否定的自己評価・心理的症状）	－

独立変数には文化変容に関する変数として“文化変容”，“文化変容方略”，“文化変容態度”，そして従属変数には心理的適応や社会文化的適応が取り上げられてきた例が多い。なお“文化変容”，“文化変容態度”，“文化変容方略”は，測定の内容を見るとすべて二軸を想定し，母文化への態度に関連する項目と，ホスト文化への態度に関連する項目を使っての測定が行われている。Ouarasse & van de Vijver（2005）以外では，四類型化も行われている。これらでは用語は不一致だが，すべて二文化への態度を評価し，時にそれらを組み合わせるという点で，内容的には類似と考えられる。そこで本稿ではこの種の試みは，“文化変容態度”の測定として表記しておく。

Berry, Kim, Power, Young, & Bujaki（1989）によれば，複数の文化を抱える社会で，個人は，他の個人や集団とどんな関わりを望むのかについて，一定の態度を保持していると考え，それが“文化変容態度”（acculturation attitudes）だという。だがBerry（2006）では，これを“文化変容方略”と呼びかえている。個人は二つの態度と二つの行動様式を持つため，態度というよりは方略と呼ぶ方が適切だというのが，その理由である。Berryはこの二つの用語間の明確な区別は述べられておらず，あいまいな使い方のようにみえる。だが自然発生的に起る志向を反映した態度なのか，戦略的にとった結果の態度なのかは，心理学的に異なる概念と考えて，扱い方を区別した方がよいのではないかと思われる。ただしBerry自身は同じ測定の方法を用いて，単に呼び方を変えただけなので，本稿では“文化変容態度”としてまとめて扱っておくことにする。

文化変容態度は，測定手続きは示されても，総じて概念的な定義は明示されていないようにみうけられる。文化変容が単なる変化を指すのみの語であるのに対して，文化変容態度はその変化を，操作的定義をもって類型化した概念といった解釈はできるだろう。具体的には，文化変容態度といえば，二軸または四類型で決められる区分を指してきたように思われる。ただし，文化変容に関する態度に，他の測定の方法や類型化のアイデアがあるかどうかは十分に検討されてきていないようである。文化変容の態度以外に，例えば文化変容の志向性などといった別の用語設定も試されていないし，文化変容の測定は極めて限定された範囲で展開している。たとえば二軸・四類型以外の整理の仕方などが案出される可能性は，十分に検討されていない。このあたりには，今後の研究展開の余地があるといえる。上記のような制約の中で展開されてきた研究の系譜ではあるが，表１から以下のことは指摘できよう。

総じて，文化変容が生じた結果として心理的適応と社会文化的適応が生じる，との仮説が立てられ，検証されてきている。心理的適応の指標としては，感情障害（emotional disorders），うつ，自尊心が用いられている。臨床的な問題傾向や病的状態のほか，肯定的な意味合いの変数も測定されている。社会文化的適応の指標としては，新環境における日常生活遂行能力や，仕事上の成功（work-success），学校での成功（school-success）が用いられている。

研究視点としては，個人的文化変容態度と適応に焦点を当てており，個人レベルのいわばミクロの視点のみで説明しようとする研究が主流である。マクロな視点，いわゆる社会的状況の変数も含めた

調査は少なく，展開が待たれる研究主題の一つといえるだろう。しかし，わずかな研究例は見られる（Berryら，2010）。社会的視点が特に意味を持ってくるのは，移民にとってその社会的環境が心理的，社会的に厳しい場合かもしれない。たとえば受け入れ社会に単一文化的な状況がある場合は，その例といえよう。異質なものに対して排他的な態度が高く，差別的な視線が移民者に向けられるとしたら，社会生活の困難性を高める結果となり，移民の精神健康を損なう可能性が考えられる。移民のメンタルヘルスを説明する際に，社会的次元を組み込むことがより重要になると予想される。以下に，こうした視点を支持する研究例をみていこう。

2．2　差別と心理的適応

海外における移民者の適応研究では，その重要な要因として，受け入れ社会から移民に向けられる差別が取り上げられることがある。Sam & Berry（1995）らは，彼らが比較的単一文化的と考えるノルウェーで，移民の調査を行った。重回帰分析の結果，四類型でいう周辺化の得点がうつ，否定的自己評価，心理的症状といった感情障害（emotional disorders）と関連が強いと報告した。その考察では，移民の若者らがノルウェー社会に同化しようとしても，実際には親の反対もあるし，受け入れ社会からも外国人扱いをされるために難しく，それゆえ周辺化した存在になりやすいのだと述べている。そしてノルウェーは文化的同質性の高い社会であるため，移民は偏見にさらされる可能性があるのだと考察している。

Berryら（2010）は，受け入れ社会としてフランスとカナダを選んで，四類型と差別の認知の関係を比較した。ここではethnic acculturation attitudes/ national acculturation attitudesを２軸に捉えて，各軸の合計点を中央値で高低に分割し回答者を４類型に当てはめている。カナダとフランスは対照的な移民政策を持ち，カナダは文化的に多様化された社会を想定した多文化主義政策を取るが，フランスは多様性のより少ない社会であり同化主義政策を取っているという。結果として，フランスでは統合（高ホスト・高エスニック）と分離（低ホスト・高エスニック）の類型に属した移民において，差別の経験が最も高かった。差別の経験は個人レベルと集団レベルの両方で尋ねられたが，いずれのレベルの差別でも同じ結果が得られたという。カナダでは，統合の類型に属した移民において，最も差別経験が低かったと報告された。これも個人レベルと集団レベルの，両方の差別に共通していたという。だがフランスでは，統合とされた移民が，分離とされた移民と同程度の被差別感を報告していた。一見不可解なこの結果に対する考察は，統合カテゴリの移民が，ある程度母文化を保持しているためではないか，というものであった。統合と分離の共通点は，母文化を保持している度合いが高いことである。そして同化と周辺化は，ともに母文化の保持が希薄なカテゴリである。調査はフランスの移民において，同化と周辺化における差別感が，統合や分離における差別感より低いことを示した。そこで母文化の保持が，カナダでは差別とつながりにくく，フランスでは差別とつながりやすいのではないか，という解釈がなされたのである。

言い換えれば，フランスで社会的な差別の度合を決めるのは，移民個人が受け入れ文化をどの程度受容しているかよりも，母文化をどの程度保持しているかだ，ということになるだろう。もしホスト文化の受容の度合次第で差別の程度も決まってくるというのなら，文化受容の高い統合・同化が，文化受容の低い分離･周辺化よりも被差別感が低い，と予想されるが，そのような結果にはなっていない。

ではフランスとカナダの違いは，何によるのであろうか。現実の世界では，ある程度の母文化を保持した移民が，ある国では大いに違和感を持たれたり差別の対象となったりしやすく，他の国ではさほどでもない，といったことは実際にありうることのように思われる。その場合，移民が母文化を保持したまま安定的に暮らせるのか，母文化を離れてホスト文化に染まることでその社会で落ち着いて暮らせるのか，ということが問題になるのではないか。これは個人にのみ帰される問題ではなく，受け入れ側がそれを認める社会であるかどうか次第なのかもしれない。ホスト社会の受け入れ体質のような，社会的特質の差異の観点から各移民の適応を分析する研究知見は，十分蓄積されているとは言い難い。ここにも，心理学的な移民研究のさらなる展開の余地を指摘できるだろう。

上記では，個人レベルの文化変容態度と心理的適応，社会的状況としての差別と心理的適応との関連を概観した。次は文化変容自体の捉え方について，より詳しくみていくことにしたい。

3．文化変容をとらえる二次元モデルの系譜

3．1　一次元モデルから二次元モデルへ

移民研究の初期には，同化の度合という一次元で文化変容が評価されてきた時期があるが，今日の文化変容研究では，ホストとエスニックの二次元で捉える視点が広まっている。この提唱者とされるBerryら（1988）は，その展望論文において，“文化変容”がしばしば同化の意味あいで使われる言葉でもあり，必然的に，固有の文化をなくしてホスト社会に吸引される意味で使われるとも述べている。そして文化変容の結果，生じる適応のパターンを整理する観点から，多様な文化変容の場面を二つの課題，すなわち“文化的アイデンティティ”と特徴の保持，およびホスト社会との関係性に対する，「はい・いいえ」の答えを組み合わせた四類型の文化変容モデルで整理できるとした。このBerryの考え方が，二次元モデルの概念的な提唱とされているものである。

ただしこの主張では，“文化的アイデンティティ”という語を用いて，エスニックアイデンティティを測定している。本稿では文化的アイデンティティにはホストとエスニックがあるという立場をとるので，この点は混乱しやすい用語の使い方といえる。Berryの上記のような“文化的アイデンティティ”の用語の使い方は，初期の研究で，文化に関するアイデンティティといえばエスニックが主に注目されていたことを反映しており，ホストの社会や集団へのアイデンティティが十分に注目される以前の言葉の使い方といえるだろう。

Berryら（1989）では，文化変容の二次元モデルについて，具体的な測定が試みられている。その後，

一貫してこの枠組みで研究を展開してきたBerry（2005）は，同化度合のみを見る一次元モデルでは，両文化を半々に持ったり，どちらも持たなかったりするケースの説明がつかない点が問題だったと，その展望論文の中で述べている。続く展望論文であるBerry（2006）では，文化変容は一次元（unidimensional）あるいは一方向（unidirectional）なものではなく，多次元（multidimensional）なもので，相互的な（mutual）概念だと主張している。Berryが提唱した二次元の文化変容と適応のモデルを，Ward & Rana-Deuba（1999）は，移民，一時滞在者，難民，ネイティブ民族などの，多様な集団における文化間比較に使われてきた実績があり，広く知られたものとして紹介している。

以上のように，文化変容の研究視点は，かつての一方的方向・同化的モデルから，Berryの二次元モデルへと軸足を移している。文化変容の二次元モデルでは，個人はエスニック集団への関わりとホスト社会への関わりを自分で選択し，方向づけるとみている。そして両集団への関わりを，同時に肯定的に持つことができるとみなしている。そこには，ホストへの同化を一方向的な変化として想定した一次元モデルに比べて，より多様な様相を捉えられるモデルとして評価することができるという利点がある。

しかしこれは，今に至っても残された課題が存在しているモデルともいえる。なぜなら双方向といいながら，二つの要素を同時に測定して並列しているに過ぎず，相互作用のダイナミズムの解明は必ずしも十分ではない。またこの二つにおさまりきれない概念があるのかどうかが十分に精査されておらず，さらに二次元以上の多次元の視点が可能かどうかという着想からの検討もまだない。これら未解決の疑問を解くことは，これからの発展的な課題といえるだろう。

３．２　個人における四類型の判断

移民個人を四類型に区分けする場合，そのための手続きは以下のように行われている。Berryら（1997）は，多文化社会においては，基本的に全ての文化集団ないし個人が，文化変容の二つの課題に直面すると考えた。それは，①文化的アイデンティティと文化的特徴の保持，②ホスト社会との関係形成である。測定としては，この二つをそれぞれ「valuableだと思うか」と尋ねている。回答の前提となるのは，第一に，①と②は同時に「はい」を選択しうる概念とみなされることである。第二に，「はい」「いいえ」の両極に分岐する選択とされることである。①と②への「はい・いいえ」の答えを組み合わせれば，文化変容の四つの方略が区分される。直面する二つの課題への答え方が，個人の方略を示すと解釈されるのである。「①はい･②はい」が統合，「①はい･②いいえ」が分離，「①いいえ･②はい」が同化，「①いいえ・②いいえ」が周辺化と命名された。

四つの類型の具体的な特徴については，次のような記載がみられる。Berry（2005）の展望論文では，「同化」は，固有の文化的アイデンティティの維持を望まず，日々の生活でホストとの交流を望むこととされている。「分離」は，自分たちの母文化を維持しながら，同時にホストとの交流を回避することとされている。「統合」は，固有の文化も維持し，ホストとも交流することとされている。「周辺

化」は，エスニック文化を消失するように強制されたために，固有の文化を維持することに消極的になり，かつ差別や排他主義のためホストとの交流にも関心が乏しい状態だと述べられている。

３．３　二次元文化変容モデルの尺度

二次元モデルの着想に沿って，文化変容態度を測定した研究を表２にまとめた。研究によっては，“文化変容態度“と“文化変容方略“という用語を使っているが，ともに本稿では“文化変容態度”としてくくっておく。以下に，測定に使われた変数の例をみていく。

表2　文化変容の二次元モデルで用いられてきた文化変容態度の尺度

著　者（年号）	対　象	測定と分類の方法	項　　目
Berryら（1989）	カナダ在住の多様なエスニック集団の移民	「文化的アイデンティティや特徴を保持したいか」,「ホスト集団との関係を維持したいか」の問いに対する「はい，いいえ」の答えを組み合わせて四分類（統合・分離・同化・周辺化）。	・友人関係についての項目例 分離：周りの友達は韓国人がほとんど，なぜなら気楽であるから。しかし，カナダの友達とはそう感じない。同化：周りの友達はカナダ人がほとんど，なぜなら，楽しいし気楽だから。しかし，韓国人とはそう感じない。周辺化：最近，私のinner feelingsを共有できる友達を見つけるのが難しい。統合：韓国人の友人との関係もカナダ人の友人との関係も価値あるものである。
Wardら（1994）	海外に居住しているニュージランド人の公務員（居住期間は1ヶ月から4年）	母文化との同一視（identification with culture of origin），ホスト文化の人との関係（relations to members of host culture）について，認知や行動を尋ねた項目群への回答を，それぞれ中央値で二分し，高低群を組み合わせて四分類（統合・分離・同化・周辺化）。	・項目例 あなたの行動や体験は母文化の人々と似ているか。あなたの行動や体験はホスト文化の人々と似ているか。
Jangら（2007）	在米韓国人移民一世	韓国文化志向とアメリカ文化志向を12項目ずつ，1対1対応で尋ね，回答者のクラスター分析によって二群（統合・分離）を抽出。	・質問内容の例 メディア，食べもの，祝日，所属感，言語，交友関係など。
Ouarasseら（2005）	オランダに居住するモロッコ人二世	ホスト／エスニックに関して，12の文化領域にわたり，1対1に対応させた68項目について，like/dislikeを評定。類型化はしない。	・項目例 オランダ料理は好きか。モロッコ料理は好きか。オランダ語は好きか。モロッコ語は好きか。

これらの研究は基本的に二次元モデルの発想を用いているが，Berryの測定方法を必ずしも踏襲はしておらず，そこに修正を加えたWardら（1994）の手法にならったものが多い。BerryとWardの測定方法の違いを以下に挙げる。第一に，Berryの測定項目は，集団間の関係よりも，慣習の実行，価値観，伝統に重点を置いているが，Wardは集団間関係にもっと焦点を当てるべきだと主張している。第二に，Berryモデルでは，最初から設定されている四類型への当てはまりが個人ごとに判定される

のみで，二軸の直接，独立的な影響力は測定できないが，Wardでは二軸の影響は個別に捉えている。第三に，Wardら（1994）は，自らの研究では教育や仕事など特別な目的をもって，自主的に移動する一時滞在者が主だが，Berryの研究は移民，難民，短期滞在者など多様なサンプルを扱っている点で異なると述べている。なお，BerryとWardの力点の置き方の違いは，こうした背景の違いを反映したものと推察される。対象が異なれば，「文化」として要点を当てる現象も異なってくる。Berryは価値観などの認知や個人の意識に重点を置いた測定を行ったが，Wardの測定項目では，対人関係など外界との関わりに重点がおかれている。

Berryは主に移民や難民などの長期異文化滞在者をみてきているが，それはWardのみている短期または一時的な滞在者と比べて，外界とすでにかなりの程度，融合している可能性があるだろう。そこではむしろ内面の変容こそが，残された深い問いになるのかもしれない。Berryは内的，Wardは外的な変化として文化変容を捉える姿勢の違いは，何が変容するかという，変容の焦点が異なることを反映したものと推察される。ということは，文化の変容を主題にする場合，何をもってその文化の変容を捉えるのかが，測定に先立って，まず最初に問われねばならないという意味でもあろう。具体的には，当該文化と母文化の間でどのような面が異なっており，それに個人はどう反応するのか，当該文化のどの側面が個人にとって重要な意味を持つのかなどが把握されねばならない。そこでは集団レベルで見た文化差に，個人レベルでみた文化観が絡むと予想される。在日コリアン研究においては，文化のどの側面で文化変容を測定するのが妥当か，明確な結論は出ていない。単に経験的に注目してきた要因が取り上げられ，論じられているに過ぎない。海外の知見との異同を比較していくためには，何をもって変容を測るのかを巡って，視点の整理が課題になっていくことを指摘したい。

３．４　文化変容態度と心理的適応

四類型と適応を巡る研究については，以下のような知見がある。四類型ごとの個別評価方式を用いた研究では，統合は心理的症状の正の予測要因，周辺化は負の予測要因であったという（Samら，1995）。これは統合の志向性が，心理的適応の高さと結びつくことを示唆する。Berryら（1997）は展望論文で，統合と心理的適応の肯定的な関係は，多くの研究から支持されていると述べている。

Wardら（1994）では，host national identificationとco-national identificationという二軸に沿った対項目を用いて，評定値の中央値で分けて四類型に分けるという，いわゆるWardの手法を使っている。そこでは，統合に該当する高ホスト高エスニックのカテゴリでうつが低く，同化に該当する高ホスト低エスニックのカテゴリでうつが高かったという。統合の心理的適応がよいという結果は，Berryらの知見と一致する。

ただしWardら（1994）のように中央値区分方式を使うと，スコアの偏りがあっても，その中での中央値で区分されるため，Berryの四類型で想定したほどには，各カテゴリの特徴が明確にならない可能性があろう。評定の絶対値をみてみないと，各カテゴリの典型性がどの程度反映されているのか

は把握できないだろう。この意味で，Berryのカテゴリは絶対的な性質を前提としているが，Wardの結果論的な区分はいわば相対的な分類といえる。後者は，相対的な高低スコアでみた場合に，いずれの社会でも共通した現象がみられるのかどうかを検討するには適しているだろう。だが相対値に還元してしまうことで，社会的特質を考慮した分析にはなりにくく，受け入れ社会を他の社会と比較して位置づける視点は省かれてしまう点が問題だろう。受け入れ社会の特徴が，四類型への偏在に反映される可能性は，やはり吟味されるべきである。そうした観点からの実証的検討には，どちらかというとBerryの手法の方が適しているのではないかと考えられる。すなわち当該社会が，滞在者にどのカテゴリの傾向を持たせやすいかという特徴を，反映させながら測定していく手法が求められている。ただし，もし社会間の比較を厳密に測定しようと思えば，ユニバーサルな質問項目だけで測定を試みるため，特定の文化・社会への関わりをどう精密に把握するのかという点に課題が生じよう。

文化変容態度の研究でいわばスタンダードとして用いられてきた二次元モデルは，文化的アイデンティティにも適用されている。これについては，次稿に譲りたい。

【引用文献】

Berry, J.W. (1980). Acculturation as varieties of adaptation. In A. Padilla (Ed.), *Acculturation: Theory, models and some new findings.* Boulder, CO: Westview Press. pp.9-25.

Berry, J.W. (2005). Acculturation :Living successfully in two cultures. *International Journal of Intercultural Relations,* **29**, 697-712.

Berry, J.W. (2006). Mutual attitudes among immigrants and ethnocultural groups in Canada. *International Journal of Intercultural Relations,* **30**, 719-734.

Berry, J.W., & Kim, U. (1988). Acculturation and mental health. In P. Dasen, J.W. Berry & N. Satorius (Eds.), *Health and cross-cultural psychology.* London: Sage. pp. 207-236.

Berry, J.W., Kim, U., Power, S., Young, M., & Bujaki, M. (1989). Acculturation attitudes in plural societies. *Applied Psychology: An International Review,* **38**, 185-206.

Berry, J.W., & Sam, D. (1997). Acculturation and adaptation. In J.W. Berry, M.H. Segall & C. Kagitcibasi (Eds.), *Handbook of cross-cultural psychology.* Vol. 3. Allyn & Bacon. pp. 291-325.

Berry, J.W., & Sabatier, C. (2010). Acculturation, discrimination, and adaptation among second generation immigrant youth in Montreal and Paris. *International Journal of Intercultural Relations,* **34**, 191-207.

Graves, T.D. (1967). Psychological acculturation in a tri-ethnic community. *Southwestern Journal of Anthropology,* **23**, 337-350.

Jang, Y., Kim, G., Chiriboga, D., & King-Kallimanis, B. (2007). A bidimensional model of acculturation for Korean American older adults. *Journal of Aging Studies,* **21**, 267-275.

Ouarasse, O.A, & van de Vijver, F.J.R. (2005). The role of demographic variables and acculturation attitudes in predicting sociocultural and psychological adaptation in Moroccans in the Netherlands. *International Journal of Intercultural Relations,* **29**, 251-272.

Sam, D.L., & Berry, J.W. (1995). Acculturative stress among young immigrants in Norway. *Scandinavian Journal of Psychology,* **36**, 10-24.

Viruell-Fuentes, E.A. (2007). Beyond acculturation: Immigration, discrimination, and health research among Mexicans in the United States. *Social Science & Medicine,* **65**, 1524-1535.

Ward, C., & Kennedy, A. (1994). Acculturation strategies, psychological adjustment, and socio-cultural competence during cross-cultural transitions. *International Journal of Intercultural Relations,* **18**, 329-343.

Ward, C. & Rana-Deuba, A. (1999). Acculturation and adaptation revisited. *Journal of Cross-Cultural Psychology,* **30**, 422-442.